

この随想を書き始めて早や5年を数えます。コロナ禍のもと無趣味な私の生活に一定の時間とうるおいを与えてくれるものとは当初思いもしませんでした。今では、生活の中に溶け込んでおり好きな時に俳句を作るという無理をしない姿勢で楽しんでいます。従来私の作句姿勢は、「多作多捨」、とにかく多く作ってほとんど捨てるでした。私が最初に出合った俳句入門書の先生のスタイルでした。5年経った今、当初ほどのエネルギーがなくなってきたこともあります。作句を義務化しないそして束縛されない考えのもとで付き合っていくことにしております。つまりは自分を見失わないということです。もう少し突っ込んで言いますと自分のために俳句するということだと思えます。

俳句は自然と関わりあっていきますから四季の微妙な変化にも心が向くようになってきました。その原動力になったのが継続でした。気の向いたときに詠ってみることにしています。それでも週に10句ぐらいでしょうか。でも、俳句は作句数が少なくなれば質が上がるといったものではないらしく一句一句でいい俳句を作るということには変わりありません。それではどんな俳句を作りたいのかということですが、私の俳句に時として「俳句上手ですね」とか「佳句作られますね」と言ってくださいます。両方とも誉め言葉には違いないのですが私は「佳句」と言っていたとき俳句冥利に尽きます。

私が思う「上手な句」と「佳句」を例句で見ますと、

* 錆びてなほ梔子の花香を残す

* 子燕の今ぞ飛翔の青の空

両句とも然程難解な句ではないので説明はなしにして「錆びて」の句は、花が枯れてきても梔子の香りだけはあたりに匂っている。実に上手い。それは老いてなお光っている姿を彷彿とさせます。表現は博識で技巧的です。しかし、措辞に何かを感じさせようとする意図が見え見えで表現が気取りすぎです。真面目過ぎて印象に残らず個性に乏しいと思えます。

「子燕の」句は素直にありのままを写生したもので理解する前に体感として受け止められます。技巧に走らず、平明で力みなく、それ故に心に沁みる佳句です。

このように俳句で欲が出てきますと自分のためというより読む方を意識した句作りになってしまいがちです。今回の最後に、私が心に留め、肝に銘じている言葉を紹介したいと思います。石田波郷という俳人が遺している言葉で、

「俳句なんてものは、大向こうを意識して、いい句を作ってやろう、うまい句を作ってやろうと思ったら、もう駄目だ。その気持ちが必ず一句の中に覗いている。“どうだ、良いだろう。ここを見てくれ”、と言う具合に。俳句とは、そんなものじゃない、下手は下手なりに一生懸命に心を込めて作れば、それが一番良いのだ」